

東京デフリンピックまで半年

11月に東京を中心に開催される聴覚障害者の国際スポーツ大会「デフリンピック」は15日で開幕まで半年。第1回から101年となる大会は身体、視覚、知的障害の選手が参加するパラリンピックとは別の道を歩み、独自性を保ってきた。

1924年にオリンピック開催後のパリで開かれた大会が第1回とされ、パラより歴史は長い。統括組織の国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）は55年に国際オリンピック委員会（IOC）の承認を受け、その地位を高めた。国際パラリンピック委員会（IPC）が創設されたのが89年。当初はICSDも構成団体の一つだった。しかし、さまざまな不利益が生じたとして95年に離脱した。ICSDは手話を使うろう者が「特に身体的な能力において自分たちを障害者とは思っていない。文化的、言語的少数者だと考えている」とし、パラとは別の独自大会の必要性を示した。

ルールは健常者の競技とほぼ同じ。サッカーやバレーボールなどの団体球技ではアイコンタクトや手話でコミュニケーションを取る。選手は声援が聞こえないため、観客席の応援の様子に目やることも多い。自転車代表の早瀬憲太郎（日本ろう自転車競技協会）は「応援する人と選手の目が、よく合うのがデフリンピック最大の魅力。お客さんも楽しめると思う」にアピールした。

デフリンピック



「ろう者の五輪」と呼ばれる。今回は夏季大会第25回で日本初開催。11月15～26日に東京都を中心に開かれ、70～80カ国・地域から選手約3000人が参加する。マラソンは首都高速道路の高速八重洲線を活用したコースで行われ、サッカーは福島県、自転車は静岡県で実施。話し声と同程度の55分が聞こえない人が出場する。競技のスタート音を光で示すなど、視覚情報で伝える以外は五輪と同じルール。

東京デフリンピックの日程

	<11月>
開会式	15日
陸上	17～25日
バドミントン	16～25日
バスケットボール	16～25日
ビーチバレーボール	16～23日
ボウリング	17～25日
自転車競技（ロード）	17～22日
サッカー	14～25日
ゴルフ	18～21日
ハンドボール	16～25日
柔道	16～18日
空手	23～25日
自転車競技（マウンテンバイク）	24、25日
オリエンテーリング	15～23日
射撃	16～25日
水泳	20～25日
卓球	18～24日
テコンドー	22～24日
テニス	16～25日
バレーボール	16～25日
レスリング（フリースタイル）	23、24日
レスリング（グレコローマン）	21、22日
閉会式	26日

※1月31日現在

陸上棒高跳び・北谷宏人

「連覇で恩返ししたい」



デフ陸上の日本選手権で競技に臨む北谷

社会人としての目標を尋ねると、簡潔な答えが微笑とともに返ってきた。「カッコいい大人になりたい」。聴覚障害者の国際スポーツ大会「デフリンピック」の有力選手が今春、新たなスタートを切った。

理解広がる好機に

4月1日、陸上棒高跳びの北谷宏人（きただに・ひろと、23歳）は約85人の新入社員の一員として、会議室の最前列にいた。

発電所の保守作業などを手掛ける東京電力の子会社、東京パワーテクノロジの入社式に東京都江東区の本社で臨んでいた。

耳に補聴器をつけ、机の上に置かれたタブレット端末には、場内で流れる音声で文字で映し出された。自分の名前を呼ばれると立ち上がり、りりしい表情で辞令を受け取った。前回2022年のデフリンピック・ブラジル大会に初出場し、いきなり金メダルを獲得した実績の持ち主だ。今年11月15日に開幕するデフリンピック東京大会では連覇が期待されている。

大阪体育大を卒業し、陸上デフアスリートの先輩が所属する東京パワーテクノロジに入社した。総務部に配属され、午前は社業に従事する。トレーニングに励むのは午後からだ。

特殊な器具が必要な棒高跳びの練習ができる施設は限られ、週末に群馬県高崎市まで出向く。平日は体力面の強化などが中心になるが「しっかりと練習できています。自分ができることを積み重ねたい」と語る。

生まれつき、聴覚障害があった。物心ついた頃、健常者の妹がつけていない補聴器の存在を不思議に思っていた母親に尋ね、初めて自分の障害を

認識した。

小中学校は特別支援学校に通ったが、高校から普通校を選んだ。中学で出会った体育の教師に憧れて「先生と同じ高校に行きたい」と思ったからだ。

「正直、初めは大変でした」

補聴器を使えばある程度の音が認識でき、会話も可能だ。しかし、これまで聴覚障害者と接する機会がなかったクラスメートは、自分との接し方が分からず、明らかに戸惑っていた。

それならばと、自分から積極的に話しかけ、クラス全員の前で自分の障害について説明した。少しずつ周囲の理解が広がり、過ごしやすくなった。

世界—4年で実現

元々、走ることが大好きで得意だった。陸上を始めたのは、中学時代に憧れた教員が陸上選手だったから。高校で本格的に部活動で陸上に打ち込み、最初は短距離に取り組んだ。だが、強度の高い練習がたり、入学後数カ月で肉離れを発症した。棒高跳びは走らなくてもできる練習があると知り、顧問からは「君のジャンプならデフ（リンピック）で世界一を狙えるよ」と励まされ、意欲が芽生えた。

最初は3メートルの高さが跳べず、大会に出場しても「記録なし」が続いた。「何が面白んだと嫌気が差した。しかし、高校2年の大阪府新人大会で優勝すると、「上」を目指したくなった。本格的に棒高跳びに転向し、めきめきと力をつけた。

大学2年だった22年には、ブラジルで開かれたデフリンピックの日本

代表に選ばれた。

初めて経験する海外の大会は何もかもが新鮮で、緊張よりわくわく感が強かった。「怖いもの知らず」で4・2メートルを記録し、頂点に立った。「取れてしまった」と自分でも驚くほどの快進撃だった。

高校時代の顧問の言葉が、わずか4年で現実となった。

今年11月のデフリンピック東京大会開幕まで、15日で半年となった。オリンピック、パラリンピックに比べてまだまだ知名度が低い「デフ」の存在を知ってもらう、大きな好機だと感じている。「連覇は期待されると思う。しっかり準備して、お世話になっている人に恩返ししたい」

5月6日、埼玉県熊谷市で行われたデフ陸上の日本選手権で、社会人になって初めての大会に臨んだ。降りしきる雨を切り裂くように力強く助走した北谷の体は、高々と宙を舞った。

3・6メートルから徐々に高さを上げて、4メートル一回目でクリアしたところで、競技をストップした。強まる雨に加え、けが明けの肩の状態を踏まえた判断だった。「4・4メートルは挑戦したかった。助走がまたまだ」

国内のデフ大会では敵なしで、今大会も優勝だったが、記録との戦いに集中している。取材に応じる姿には、悔しさがにじみ出ている。自己ベストは4・63メートル。高い目標と分かっているが、5・06メートルのデフ世界記録更新が目標だ。

人生の階段を一つ上がり、会社の期待も感じている。「社員の皆さんと一緒に盛り上げていきたい」。最高の舞台は刻一刻と近づいている。

【川村咲平、写真も】

北谷 跳躍で感動届ける



陸上男子棒高跳びでデフリンピック2連覇を狙う北谷宏人

東京デフリンピックまで1年

男子棒高跳び 連覇狙う

来年11月に日本で初めて行われる聴覚障害者の国際スポーツ大会、デフリンピック東京大会の開幕まで15日であと1年となる。2022年ブラジル大会で陸上男子棒高跳びを制した北谷宏人(22)(大体大)が12日、

取材に応じ「デフリンピックは自分たちが主役として戦える。健常者の大会との違いも楽しんでほしい」と呼びかけた。

跳びに打ち込んできた。ブラジル大会では悪天候でも集中力を保ち、4月20をマークして金メダルを獲得。さらに大会後の22年10月に実施されたデフ陸上の日本選手権で4月63の日本新記録も樹立した。メダル候補として臨む東京大会に向け「優勝が最低ラインと(周)りから」思われるだろう。自分が納得できる4月80ぐらいの記録で2連覇したいと力を込める。

図にスタートを切ったりする。これまでなじみのないデフスポーツに関心が高まるのが期待されるが、その中で自らの雄姿を披露したいと考えている。「観客席を全部埋めてもらいたい。僕の跳躍で少しでも感動してもらいたい」と意気込む。来春にはデフ競技への理解を示してくれた東京都内の企業に就職する予定だ。地元を離れることに迷いもあったが、「競技ができる時間は限られている」と決心した。北谷にとって密度の濃い1年になりそうだ。

(大館司)